# 山の神と童子（どうじ）

鹿児島県

むかし、あるところに、貧しいお母さんと男の子が住んでいました。お母さんは、毎日、山でたきぎを取って、それで暮（く）らしをたててていました。

やがて、男の子は十一、二歳（さい）になると、お母さんに、

「お母さん、お母さん。これまで苦労（くろう）をかけてきましたが、これからは、ぼくが代わりにたきぎを取りに行きます。きょうからは、お母さんはうちにいてください」といいました。お母さんは、よろこんで、弁当（べんとう）を作って男の子に持たせてやりました。

ある日のこと、男の子は、いつものように山に行きました。そして、お弁当を木の枝（えだ）にかけておいて、その木に登って枯（か）れ枝を取っていました。すると、白髪（しらが）のおじいさんがやって来て、男の子をちらちら見上げながら、かけてあるお弁当を取って食べ始めました。男の子は、枯れ枝をたくさん取って木から下りてくると、おじいさんに、

「それは、ぼくのお母さんが作ってくれたんだよ。よかったら、ぜんぶお食べよ」といいました。おじいさんは、

「年をとるとひもじいものなんだよ」といいながら、お弁当をたいらげてしまいました。

男の子は、家に帰ると、お母さんに、

「きょうは、白髪のおじいさんが来て、お弁当をよろこんで食べて行ったよ」といいました。お母さんは、

「そうかい、そうかい。それじゃ、あしたは、お弁当をふたつ作ってあげるから、ひとつはおじいさんにやって、もうひとつはおまえがお食べ」といいました。

あくる日、男の子は、お弁当をふたつ持って山に行きました。そして、お弁当を木の枝にかけておいて、木に登って枯れ枝を取っていました。すると、またあのおじいさんがやって来て、男の子をちらちら見上げながら、お弁当を食べ始めました。男の子は、木から下りてきて、おじいさんに、

「きょうは、お母さんが、お弁当をふたつ作ってくれたんだ。ひとつ食べてたりなかったら、もうひとつお食べよ」といいました。おじいさんは、

「年をとるとひもじいものなんだよ」といいながら、お弁当をふたつとも食べてしまいました。

あくる日、お母さんが、
「きょうは用があるから早く帰って来い」といって、お弁当をひとつだけ持たせてくれました。
男の子が、山に行って木に登ろうとすると、あのおじいさんがあらわれて、
「ちょっと待て。おまえにいって聞かせたいことがある」といいました。男の子が、
「いったい、なんだい」というと、おじいさんはいいました。
「じつは、わしは、山の神だ。これからわしのいうことをよく聞いて、そのとおりにするのだよ。天竺というところに、りっぱなお寺がある。おまえは、そこへ行ってお参りをするのだ。旅のとちゅうでだれかがおまえに頼みごとをするはずだから、その頼みごとも聞いてやるんだよ」
そういったかと思うと、おじいさんは、たちまち、樫の大木になりました。
男の子は、家に帰ると、おかあさんに話をして、さっそく、天竺というところへ行くことにしました。ところが、道中で食べる物がありません。そこで、村の長者さんの家にお米とみそを借りに行きました。長者さんは、
「貸してやってもいいが、何にするんだ」と聞きました。
「これから、天竺のお寺にお参りに行くのですが、道中で食べる物がないのです」と、男の子が答えると、長者さんは、
「そうか。それはちょうどよい。じつは、うちの娘が、三年の間わずらって、良くもならず悪くもならずにいるんだ。お寺に着いたら、娘が治るように拝んできてくれないか」といいました。男の子は、
「はい」といって約束し、お米とみそを借りました。それから、天竺へ旅立ちました。
やがて、男の子は、りっぱなお屋敷の前を通りかかりました。すると、その家の主人が、
「おまえは、どこへ行くのだ」と聞きました。男の子が、
「天竺のお寺にお参りに行くところです」と答えると、主人はいいました。
「それはちょうどいい。じつは、この家では、サンダン花という珍しい花を作っていて、それを売って暮らしているのだが、ちかごろ、サンダン花の元の木と二番の木が枯れて、いまでは、三番の木にしか花が咲かない。元の木と二番の木にも花を咲かせたいのだが、天竺のお寺で拝んできてくれないか」

男の子は、
「はい」と答えて、その晩は、そのお屋敷に泊(と)めてもらいました。
あくる朝、男の子は、お弁当を作ってもらって、出かけました。どんどん歩いて行くと、大きな川がありました。
「さあ、こまったことになった。どうやったらこの川をわたれるだろう」と、男の子がこまっていると、川の向こう岸を、女の人が歩いているのが見えました。そこで、
「おういー、おういー。この川は、どうすればわたれますか」と声をかけました。女の人は、またたきひとつする間に河をすうっとわたって、男の子のそばに来ました。そうして、
「どこへ行くのです」と聞きました。
「天竺のお寺にお参りに行くところです」と、男の子が答えると、女の人は、
「それはちょうどいい。わたしは、陸に千年、川に千年、海に千年生きてきた者で、まことの人間ではない。天に上りたいのだが、上る方法がわからず、いつまでもこの地上をさまよっている。どうか、天に上れるよう、拝んできてくれないか」といいました。男の子が、
「はい」と約束すると、女の人は、
「では、わたしの頭の上に乗りなさい」といいました。男の子が頭の上に乗ったかと思うと、女の人はつうっと川をわたって、たちまち向こう岸に着きました。
やがて、はるか向こうにりっぱなお寺が見えました。男の子は、どんどん歩いて行きました。
お寺に着いてみると、本堂(ほんどう)のおくに、あの白髪のおじいさんがすわっていました。おじいさんは、男の子に、
「おまえはここに来るのに何日かかったか」とたずねました。
「ゆうべ一晩泊ったばかりです」
「それはよかった。ところで、来るとちゅう、何か頼まれたことはないか」
「はい、頼まれました」
「何を頼まれたか」と、おじいさんが聞くので、男の子は、
「村の長者さんの娘が三年の間わずらっています。それで、病気が治るように拝んできてほしいと頼まれました」といいました。すると、おじいさんはいいました。
「ああ、そんなことか。それは、その家の雇人(やといにん)や近所の男の人をみんな集めて、娘に盃(さかずき)をさ

させてみるのだ。娘が盃をさした人と結婚させれば、病気は治る。そのほかに何か頼まれなかったか」

「はい。旅のとちゅうで泊めてもらったお屋敷で、サンダン花をつくっているのですが、その元の木と二番の木が枯れてしまいました。また花が咲くように、拝んできてほしいと頼まれました」

「それは、その家の先祖が、サンダン花の根元に黄金を入れたつぼを埋めておいたが、子孫がいつまでも知らずにいる。それを掘り出させるつもりで、花を枯らして知らせているのだ。そのつぼを掘り出して、ひとつはおまえがもらい、ひとつはその家の主人がとれば、元の木も二番の木もすぐに生き返る。ほかにはもう何も頼まれなかったか」

「はい。じつは、ここへ来るのに、女の人が大きな川をわたしてくれました。その人は、陸に千年、川に千年、海に千年生きてきて、天に上りたいのに上れないで地上をさまよっています。どうか、天に上れるように拝んできてほしいと頼まれました」

「そうか、その女に会ったら、こういってやれ。『おまえの持っているニンジョの玉をひとつ、人間にやりさえすれば、いつでも天に上れる』と」

おじいさんは、そういって、

「頼まれたのはそれだけか」と聞きました。

「はい、それだけです。ありがとうございました」と、男の子がいうと、たちまちおじいさんは、樫の大木になりました。

男の子は、しっかりお参りして、帰っていきました。

大きな川のほとりまでもどって来ると、あの女の人が待っていて、

「頼んできてくれましたか」と聞きました。男の子は、

「まず、向こう岸まで運んでください。それから教えましょう」といいました。女の人は、男の子を頭に乗せて、つうっと、川をいっきにわたりました。男の子は、

「あなたは、ニンジョの玉を持っているでしょう。その玉をひとつ、人間にやりさえすれば、いつでも天に上れるそうですよ」と教えました。女の人は、

「では、あなたにこの玉をあげましょう」といって、玉をさしだしました。男の子が玉を受け取ったとたん、遠くからおそろしく大きな音が聞こえてきて、あたりが霧でおおわれました。男の子は、おそろしくなって、どんどん逃げ出しました。ずいぶん走って、ふり返って

みると、霧が晴れて、水の柱(はしら)が空高く上っていました。女の人はその水に乗って、天に上っていきました。

やがて、男の子は、お屋敷に着きました。主人が、

「頼んできてくれましたか」とききました。

「はい。あなたのご先祖さまが、サンダン花の根元に黄金のつぼを埋めたそうです。それを掘りだせば、元の木も二番の木もすぐに生き返るそうですよ」

主人は、すぐにサンダン花の根元を掘りました。すると、黄金のつぼがふたつ出て来ました。そのひとつを男の子にやると、枯れていた木に、たちまち花が咲きました。

あくる日、男の子は、ニンジョの玉と黄金のつぼを持って、村に帰っていきました。すると、長者さんが待っていて、

「頼んできてくれたか」と聞きました。

「はい。娘さんが盃をさした人と結婚させれば、病気は治るそうですよ」

長者さんは、よろこんで、雇人や近所の若者たちを集めました。ところが、娘は、だれにも盃をさそうとしません。長者さんは、男の子に、

「おまえも、近所の若者だ。どうか、盃を受けてみてくれ」といいました。そこで、男の子が娘の前に出ると、娘は、すぐに盃をさしだしました。男の子が盃を受け取ったとたん、娘の病気は治って、立ち上がって舞(まい)を舞いました。

男の子は、長者さんの家の婿(むこ)になって、お母さんも呼び寄せ、いつまでも幸せに暮らしたということです。

おしまい

村上郁再話

資料『沖永良部島昔話』岩倉市郎／民間伝承の会